

## VI 国 際 活 動

## 第 1 回 韓 日 生 態 学 術 会 議

岩 城 英 夫 (生物科学系)

昭和56年7月27日-31日の5日間、韓国ソウル市建国大学校で開かれた韓日生態学術会議に出席した。この会議は韓国生態学会の主催によるもので、日本からは4名の植物生態学者が参加した。

会議では、自然植生の研究を中心に、双方各4名が研究発表を行なった。私は「日本におけるバイオマスと植物生産量の地域分布」について報告した。この他、日本側からは、日本の自然植生とその研究の現状、草地植生の型と遷移、松枯れの生態システムについて報告があった。韓国側は、朝鮮半島の自然植物分布と気候、南鮮の海岸植生、害虫による赤松林の変化(韓国には材線虫による松の被害はない)、汚染物質の植物影響についての報告があり、活発な討議が行われた。

会議終了後、ソウル市近郊の光陵にある自然保護林を調査した。ここには、極相に近い落葉広葉樹林が保存されている。なお、最近数十年の緑化運動の成果として、ソウル周辺の山地にはかなり樹林が回復しているとの印象を受けた。韓国滞在の最終日には、韓国自然保存協会の招待で韓国側のメンバーと懇談会を行ない、自然保護、環境保全に関する両国の研究協力の可能性などについて意見を交換した。

## 国際シンポジウム EXPO '85 “人間・居住・環境と科学技術”

大 橋 力 (応用生物化学系)

本シンポジウムは、1985年に開催される国際科学技術博覧会の先行事業の一環として1981年度から1985年度まで継続的に実施されるもので、今回はその第一回目として催された。プログラムは全体会および「人間」、「居住」、「環境」の三つの分科会からなり、筆者は「居住」分科会および「環境」分科会のパネリストとして報告および討議を行なった。

### ①「居住」分科会(司会：公文俊平東大教授)

新しい居住概念の提唱を中心に討議が行なわれた。筆者はVTR映像資料を展示するとともに、居住スタイルによる“棲み分け型社会～非棲み分け型社会”という社会の類別法の提案を行なった。

### ②「環境」分科会(司会：村上陽一郎東大助教授)

“情報環境”概念の提唱が行なわれた。筆者は、VTR映像資料を用いて、「情報環境」と「物資環

境」との同意義性を示す作業を中心に発表・討論を行なった。

## 国際科学会議『実際の生態学』

川喜田 二郎（歴史人類学系）

1981年9月に行われた国際科学会議『実際の生態学』（UNESCO／ICSU Conference Exhibit “Ecology in Practice”, Paris）に出席し、「急所に挑む方式（KPA）」について発表を行った。

この会議全体の狙いは、ユネスコの「人間と生物圏（MAB）計画」発足以来の10ケ年を反省し、これからの10ケ年への方針を作るにあった。

出席は、のべ400人。常時100～150人の由であった。盛大である。

（a）全体に問題解決指向、すなわち環境保全をどうすればよいか、そのためのアプローチが強調された。

（b）この指向に対し、過去10年のMABの歩みにおける主な反省点は、従来の専門化された分析的アプローチへ安易にもたれかかること、その反面ホーリスティックで学際的な方向の掘り下げが欠乏していること、それらに加えて、問題解決への実践性についての迫力に欠けることにあった。

（c）学際性の弱さにも関連し、自然科学系・技術系に対し社会科学系の学者の活動がMABの中で軽視されてきたことも問題だと指摘された。

（d）現実の要請が先行し、学問的対応が遥かに遅れている。この問題は結局、今日の科学の発達方向に対する根本的反省に通じている。特にホーリスティック・アプローチの方法が未開拓なこと、評価をめぐる科学的方法が未開拓で「科学は没価値的」というだけの従来の常識論を越えられていないことが、問題点であろう。

（e）従って、MAB関係者の中に、以上の問題点の解決に寄与するような人びとを、今後もっと加えて頂きたい。単に専門家のコンクールの場と見なすような低次元の扱いにならないことを望む。

## 日米交流都市交通問題調査会議

黒川 洸 (社会工学系)

昭和56年10月28日より11月8日まで、上記調査で、アメリカのポートランド、ロスアンゼルス、サンディエゴ、アトランタ、ワシントンD. C.、ニューヨークの6都市へ出張した。この会議は財団法人ジャパンソサエティ（在ニューヨーク）が企画管理したもので、アメリカ側4名、日本側4名の調査団により、都市交通のうち特に公共交通機関のあり方について相互に訪問調査し、今後の自国の交通計画に役立たせ、また相手国への提言を試みようとしたものである。アメリカ側の視点は、日本で、鉄道、バスが都市交通の重要な交通手段として市民から利用され、また効率のよい運営をしている点に注目したものであり、日本側の視点は、アメリカのように自動車が完全に普及してしまった国で、公共交通機関を維持するため、個人の交通手段選択選好を十分考慮したサービスを展開している点に注目し、これを今後の日本の計画に取り入れることを目的としていた。アメリカ側は昭和56年9月に日本の都市の調査を行なった。

この調査結果については、昭和57年4月にロスアンゼルスで行なわれた“大量輸送機関国際会議”でフォーラムとして報告会をもち、さらに和文については“運輸と経済”昭和57年6月号に発表し、英文については、国際交通安全学会より出版予定である。

## 国際地域科学学会

河野博忠 (社会工学系)

1) 国際地域学会第7回太平洋大会がオーストラリアのSurfers Paradiseで1981. 8. 15～20に開催された。私はこれに出席して、The Optimal Control of Exhaustible Resources and Pollutionと題する環境科学に関する論文を発表し（PAPERS of the RSA に収録予定とのこと）、そして他のセッションの議長の任もはたしてきた。

大会と平行して開かれた「国際地域学会太平洋大会開催機構」(The Pacific Regional Science Conference Organization = PRSCO) の Executive Committee に出席し、PAPERS of the RSA の太平洋大会分の Editor を前回に続いて拝命し、かつ“次回太平洋大会を東京で”という依頼を受け、これを日本地域学会にもち帰った（1983年8月17～20日に東京で第8回太平洋大会が開かれることになる）。

2) 国際地域学会第28回北アメリカ大会がカナダのMontrealで1981. 11. 13～15に開催され、

これに出席して、Simultaneous Optimal Allocation of Public Investments to the Interurban Comprehensive Transport System and Regional Living - Environmental Facilities と題する環境科学に関する論文を発表してきた。

3) 1982年国際学術大会・都市社会問題研究会議が大韓民国ソウル特別市で1982年1月12日～15日に開催され、これに出席して、“都市脆弱地域の再開発プログラム”と題する論文を発表してきた。

4) 第21回アメリカ西部地域学会年次大会に出席して、An Analysis of the Land Property Tax in a Spatial & Dynamic Context と題する論文を発表してきた。

### 第3回国際有機フリーラジカルシンポジウム

手塚敬裕 (化学系)

昨年9月初め、西ドイツ、フライブルグ市で開催された有機フリーラジカル国際討論会で研究発表を行った。この討論会はオリンピックと同じで、4年に1回開かれる、という貴重な会議である。その後、スイス、フランスの大学を訪問して帰国した。

討論会の内容は、最も基本的で重要な有機フリーラジカルの反応性に関するものであり、たとえば新しい有機過酸化物の化学、スーパーオキシドによる酸化反応、OHラジカルの反応、フリーラジカルの反応性の体系・分類法、等がある。これらに加えて、最近特に生体内でのフリーラジカルの挙動が問題になっていて、チッソ酸化物 ( $\text{NO}_2$ )、過酸化水素 ( $\text{H}_2\text{O}_2$ ) による脂質酸化反応等も発表された。特に環境研究科との関係を探すとすればこのような発表であろう。しかし、どの研究も高い水準のものであり、大変有意義な1週間であった。化学の会議では、化学記号等全て抽象の世界における構築のみが話題であり中心となる点興味深い。勿論有機フリーラジカルは老化、発癌、汚染の開始あるいは伝播に一役買っていることは皆承知の上での話しである。私の発表は、最近本学化学研究科学生成田望との協力ではじめて開発した無水・無触媒条件下でのOHラジカル発生試薬を用いた芳香環の水酸化であった。多くの点で有意義であった。

会議終了後、西ドイツ Würzburg 大学 Adam 教授；スイス、ETH. Jeger 教授；フランス、Ecole Nationale Supérieure de chimie de Mulhouse, Strith 教授；パリ、ピエール、マリー・キュリー大学、Marquet 教授を訪ねセミナーあるいは講演を行い帰国した。

## 点字システムの調査及び漢字処理システム開発会議出席並びに 米国における図書館ネットワークについての調査

中山和彦（電子・情報工学系）

昭和56年5月9日から同月17日まで、上記目的のためにアメリカ合衆国に出張した。身障者短大（仮称）の設立の準備のために、アメリカにおいてげんぞんするコンピュータ用の点字端末を視察するとともに、その実情について調査することが第一の目的であった。その結果、今後の日本における点字総合システムの開発に益する示唆を与えることができた。

第二の目的である会議出席は、アメリカの大学専門図書館協会のアジア関係専門図書館の整理、出力のために必要なシステムの開発に対するアドバイスのためにスタンフォード大学よりの招待によるものである。そこでの成果は、具体的なシステムとしてすでに開発にとりかかっている。

同会議に出席したアメリカの大学図書館人から図書館ネットワークの現状、問題点についていろいろな情報を入手するとともに、諸種の討議を行った。

## 世界保健機関，国連食糧農業機関，国連環境計画機関合同会議

吉田富男（応用生物化学系）

自然・天然資源の開発，とくに水資源の開発とその利用計画に当って，われわれ人類の健康や環境の保護について配慮すべきであるという観点から，国連三機関のWHO，FAO，UNEPが共同協議をして，PEEM（Panel of Experts on Environmental Management for Vector Control）という組織を作った。PEEMは先進国や開発途上国の行政官ならびに研究者からなる60名と，世銀，UNDPなどからの代表者などによって編成されている。私はFAOからの招へいで，PEEMメンバーとなり，1981年9月にスイスのジュネーブで開かれた第1回の会議に出席した。この会議での主な議題はPEEMの組織作りの具体策と，今後3ケ年にわたる企画やプロジェクト研究に関しての検討であった。

本会議での主な焦点は，水田稲作地帯でのマラリア，住血吸虫，フィラリアなどの伝染性病害虫が著しい勢いで蔓延している現状——最近中近東などでとくに問題になっている——についての対策であった。中近東，アフリカ諸国の食糧問題解決の一端として，エジプトのアスワンダムムの灌漑による水田稲作普及などに代表される農業用水開発によって，開発途上国における最近の食糧生産は目ざましいものがある。しかし反面，水を媒介する熱帯特有の伝染性病害の発生が著しくなってきた。

これらに関して、社会・経済、教育、技術などのあらゆる方面から検討された。開発途上国の現状では、先進国なみの農業的工業的技術面からの解決は難しく、水田稲作に農薬や化学肥料を用いずこれらの伝染性病害虫をコントロールしようという訳である。私は本会議において、「Rice Farming and Ecosystems of Paddy Soils」という題目で講演した。討論では灌漑方法、水田の水管理、や土壌管理、天敵利用などについて論議された。つぎのPEEM会議はアフリカのナイロビで行われることや、本会議に関する報告書の発行、「The PEEM Newsletter」の定期的発行などが決議された。